（様式第1号）

研究No.（記載不要）	18 －文学－ 1

平成 18 年度配分 研究成果の概要

研究名	ストレス体験に伴う対人的相互作用が大学生の自己成長感に及ぼす影響				
配分を受けた特別研究費	文化政策学部長　特別研究費　776　千円				
研究者氏名（代表者）	学部名	学科名	職	氏　名	共同研究の場合の分担
	文化政策	文化政策	准教授	福岡欣治	
共同研究者					

発表の方法（予定で可）	1 紀 要	号 数	第 8（または9）号（※執筆予定）
	2 学会等での発表 学会等名： 日本発達心理学会 および関連他学会（日本教育心理学会等）	発表日（発表予定日）	平成 20 年3月（※発達心理学会）
	3 その他 発表の方法：	発表日（発表予定日）	平成　年　月　日

注：配分を受けた翌年度の 6 月末までに提出

（研究の目的等）

生活上のストレスに対処することは人にとって不可避の課題であり、大学生にも例外ではない。特に大学生は自我同一性の確立という発達課題に取り組みつつ、学業生活に積極的に関与していかねばならない。他方、ストレッサーに直面した人はしばしば親しい他者に自らの体験や感情を開示し、他者からの共感や具体的な援助を得て対処していく。そして、長期的にみた場合、ストレッサーへの対処の積み重ねはその人の自己概念を変化させ、時に自己の成長感（stress-related growth）をもたらすと考えられている。本研究では、ストレス体験とそれに伴う対人的相互作用が、大学生の自己成長感に及ぼす影響について検討することを目的とした。

（研究の実施方法等）

本学を含む複数の大学において、主に新入生を対象として、複数回の質問紙調査を実施し縦断的な分析をおこなった。調査の内容は、ストレッサーへの直面とそれへの対処における体験の自己開示、周囲の反応、精神的健康、および成長感に関する内容を含めた。なお、調査は数ヶ月間についての回顧報告と調査直前週に関する報告の2通りをおこない、より詳細な把握を目指した。スケジュール等の概略は下記の通り。

平成 18 年5～6 月
調査票の構成および本学およびA大学での第1回調査の実施。週単位で、授業の中間試験のタイミングを利用。
平成 18 年7月、9月
本学（7月）、A大学（9月）での調査実施。4月以降の期間についての回顧報告。本学では週単位の調査も並行実施。期末試験のタイミングを利用。
平成 18 年 11 月
本学での調査実施。週単位で、授業の中間試験のタイミングを利用。
B大学での調査実施。週単位で、通常の授業期間での調査。
平成 19 年1～2月
本学およびA・B・C大学での調査実施。本学とB大学は後期開始以降、A大学・C大学は4月以降についての回顧報告。期末試験のタイミングを利用。

（得られた成果等）

本研究は基本的にはストレス対処とその影響に関する基礎研究であり、人が周囲の他者と関わりながら自らを成長させていく過程への理解を深めることを目指している。大学生は学期ごとに新たな授業・試験に取り組む等、時期的・内容的に共通のストレッサーに直面すること、および発達段階的にも自己概念の変化を伴いやすい時期であることから、この問題の検討に適した集団と言える。

現時点ではデータ分析を継続中であり、詳細は本年度の日本発達心理学会その他で報告する予定である。分析の観点は、ストレッサーへの対処過程における対人相互作用が時間経過に伴い自己概念の変化とどのように関連するかである。なお、学会発表での主眼とはしないが、適宜本学と他大学の学生を比較し、教育の対象である学生の状況把握にも役立てたい。